

日本の過去をネガティブに評価する教育が連綿となされてきた。それが、国語教育への熱意を失わせる大きな要因となった。日本の文芸のピークは、明治期、大正期であった。「現代の古典」が読まれなくなっている。残念なことだ。
 日本の文化的伝統は、何より

も言語の中に凝縮されている。若いうちに優れた文章を身に染み込ませることが必要だ。日本の文化的伝統を理解することなしに、国際協力はあり得ない。公に生き、公に殉じる精神がなければ国際協力も持続できない。日本人という認識を超えて、一個人から一気に地球市民とい

う認識に至る人間観が一部にあるが、私には、理解困難な発想だ。
 私の専門は開発経済学である。欧米の専門家が多い分野に日本人として乗り込んでいる。私は、日本人による国際協力は、日本の経験に基づいたものでなければならぬと常々主張して



渡辺 利夫 拓殖大学学長・大学院長

日本文化知らずに国際協力なし

きた。

これまで各国が国際協力を進めてきたが、優れた手法は、各国の経験を現地の状況に応じて修正したものに限られている。

国際協力の現場に立つ若者は、日本人であるという事実から逃れられない。あるならば、日本人に固有な、日本の文化を反映した国際協力の手法を構築しなければならない。

そのためにもまずは、自国への関心を深め、自国を愛するよう努めなければならない。

日本政府が国際協力分野に拠出するODA(政府開発援助)予算は、このところ大幅に減少を続けてきた。残念なことである。軍事力の行使が憲法上厳しく制約されているわが国にとっ

て、国際協力こそ「平和主義」の名にふさわしい行動である。一九九〇年代のODA額は世界トップクラスを誇った。今再び、国際協力の意義を見直さなければならぬ。

そのためには、人材育成が一段と必要となる。国際協力の現場は過酷である。協力に高い志を持って、人生を懸ける若者を育てたい。

高等教育では、国立大学を中心に、大学院レベルでは専門家を育成する課程が設けられている。わが拓殖大学は、学部レベルでの人材育成を求めて国際開発学部を設置した。

さらに、小・中学段階、高校段階の教員らを主な対象として、拓殖大学国際開発教育センターを設け、開発教育ファシリテーターの養成を始めている。小・中学生、高校生

に国際協力の意義、内容、展望を知ってほしい。

国際的相互依存関係を楽しんで高度に発展した日本にとって、貧しい国を支援し、豊けられた人々を助けることは道徳的な義務である。国際協力は必ずや日本人の幸せにつながる。「利他的に生きることが「利己的」に生きることに比べて、人間をより幸せにするのである。

ファシリテーターには、子どもを奮起させるスキルを身に付けてほしい。開発教育に携わる小・中学校、高校の先生方が集まる学会を近々設けたい。本学がセンター的な機能を果たすようにしたい。

本学に国際開発学部学部長として着任して以来、六年目に入った。学生にとって、実践が重要であると痛感した。教室で国際協力の必要性を説くだけではまったく足りない。開発途上国に出して、活動をさせる。貧し

い人々のために何がしか、いいことができたという気分が彼らを幸せにさせている。それが国際協力の現場で活躍する行動につながるべく。

拓殖大学の中でも国際開発学部は小さい。学生数は千二百人ほどである。小さいものが大きいものを変えるのは難しいが、実行しなければならない。

東大や京大が変わっても日本は変わらないが、拓殖大が変わると日本が変わる。日本の平均的なマジョリティー(多数者)が国際協力の大切さに自覚しなければ、大きな力にはならない。この精神で大学運営にも努めている。

〈プロフィール〉 昭和14年生まれ。慶応大大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大教授、東京工業大教授などを経て平成12年拓殖大国際開発学部長、本年4月から現職。